

ジャコバンサイトの 10 月 21 日の記事から

<https://jacobin.com/2025/10/zohran-mamdani-democrats-nyc-strategy>

■ゾーラン・マムダニが民主党に教える 5 つの教訓

フリード・シャヒド

ゾーラン・マムダニは民主党主流派と同じ論理で動いていない。フリード・シャヒドが、マムダニが突破口を開いた 5 つの核心的側面を解説する。

民主党は議論に負けているだけでなく、しばしば議論の場そのものを失っている。問題はメッセージングの域を超えている。これは注目度の危機であり、その根底には信頼性の危機が横たわる。有権者は依然として世論調査で民主党を支持すると答えるかもしれないが、来週支払うべき何かの代価を変えられると信じる者はほとんどいない。これは詩と散文の失敗だ—もはや人々を鼓舞しない選挙運動と、もはや成果を上げない政治である。

民主党は、自らが支持する政策よりも、反対する政策(トランプ主義、「目覚め主義」)によって自らを定義することが多い。どのコミュニティを擁護すべきか、また、育児、反戦、移民の権利、住宅問題など、具体的な課題の中で、どの問題について勝利を目指す意志があるかについて、躊躇している。より深刻な問題は、民主党のリベラリズムが、自らに確信を持たず、海上で漂っているような状態にあることだ。民主党は、自分たちが何のために存在しているかを知っているかのように振る舞うことを忘れてしまっている。

その不確かさは、彼らが語る物語にも表れている。アンドルー・クオモは、ドナルド・トランプと同様に、ニューヨークを地獄のような場所、つまり犯罪と衰退と失敗に満ちた都市であり、自分だけが救える場所だと表現した。ゾーラン・マムダニは、同じ都市を見て、別のもの、つまり喜び、闘争、そしてそこに留まりたいという願望を見出している。他の人が衰退を語る一方で、彼は修復する価値のある場所を見ている。それは、民主党員があまりにも頻繁に見落としていることだ。恐怖や反対だけに基づいて構築された政治は、人々を鼓舞することはできず、反対し、管理することしかできない。必要なのは、人々を危機の犠牲者としてではなく、まだ修復し、構築できるものの共同制作者として扱う政治だ。

マムダニは、周囲の政党とは異なる論理で活動しているように見えるため、そのイメージを揺るがしている。コンサルタントの目には、彼は珍奇な存在に映る。TikTok に精通しディアスポラ的な軽やかさを備えた若き民主社会主義者—拡散されるために生まれた新種の政治家の一人だ。しかし彼を際立たせるのは新奇性ではなく信念である。彼は「幸福な戦士」のように振る舞う—政治の不条理を痛感しつつ、その可能性を諦めようとしない。政治が依然として人生の苦痛を和らげ得るとの確信を持って語る。

マムダニが真に試しているのは、民主党が自らの方法で、対立を通して注目を集められるかどうかだ。現代の政治メディアは流血を伴うもの—文化戦争や有名人同士の確執—のみを増幅し、人々の生活を実際に定義する対立—上昇し続ける家賃、給料を吸い取る育児費、来ない公共交通—を無視する。分裂を招くと見なされるのを警戒する大半の民主党員は、対立から完全に退くか、間違った争いに巻き込まれる。

▼マムダニを際立たせるのは斬新さではない。確固たる信念だ。

マムダニは、注目が対立によって生み出されることを理解している。そして答えは対立を避けることではなく、その方向性を変えることだと。彼は「誰が支払い、誰が利益を得て、権力はどのように機能するか」という、手頃な価格の問題を中心に据え、経済的闘争を可視化し、感情的に理解しやすい形にしている。彼にとって対立は統治の妨げではなく、説得への入り口なのだ。目的は怒りを演じるのではなく、それを集中させ、政治が依然として人々の生活を支配する物の価格を変えられることを思い出させることだ。

マムダニの魅力は、単に若々しい雰囲気だけにあるのではない。それは民主党が避け続けている二つの問いへの彼の答えにある。民主党員は風刺画のような存在にならずに注目を集められるのか？ そして注目を得た後、それを活用して政治を「人々の支払い額や生活様式を変えるシステム」として理解可能にできるか？

彼の手法は、通常共存しない伝統を融合させる:バーニー・サンダースの道徳的明快さ、アレクサンドリア・オカシオ＝コルテスのデジタルと運動のリズム、「豊かさ」の本能による構築と障壁除去、有能な経営者の地に足の着いた能力、そして聴衆に届く方法を知る文化労働者の物語構築術。重要なのはスタイルそのものではない。それは技術としての説得力—民主党が再び経済分野で主導権を握り、権力について率直に語り、なおかつその言葉に誠意を込められることを示すことだ。

1. 実質から始める

マムダニはまず問題を明快に提示する:ニューヨークは高すぎる。次に解決策とその実行方法を示す。家賃ガイドライン委員会を通じて、家賃の安定化を図る代わりに、さらなる家賃値上げを承認しない。バスを高速かつ無料にし、2.90ドルを請求しない。普遍的な保育に資金を提供し、親たちが生計を立てることと子育てのどちらかを選択する必要がないようにする。これは、夢を語るのではなく、システムを修正する人の声である。これは診断であり、解決策であり、権力の理論である。

そこが、ほとんどの民主党員たちが躊躇する点だ。チャック・シューマー、ハキーム・ジェフリーズ、カマラ・ハリス、あるいはジョー・バイデンが、より大きな権力を手に入れたら何をするか、つまり、有権者たちの生活はどのように変わるかを尋ねてみると、肩をすくめるだけだ。民主党の言語は、あまりにも多くの場合、「中産階級の安全」、「すべての人に機会」、「手頃な価格の住

宅」といった、意図が曖昧な言葉ばかりだ。基本的な疑問、つまり「何が問題なのか？どのレバーを引くのか？ 誰が動くべきなのか？」その説明では、権力とは行使されるものではなく、管理されるものである。

2. 対立によって注目を集める

現在のメディア環境では、注目は対立によって配分される。文化戦争、有名人のような口論、党内の争いは注目を集めるが、家賃やバス料金をめぐる争いはほとんど注目されない。経済的苦痛は日常茶飯事ゆえ「ニュース価値」が低い。2.90ドルの運賃、6%の家賃値上げ、16分の救急対応時間——どれをとっても「誰が誰を侮辱したか」の拡散動画には敵わない。これが民主党が突破すべき壁だが、大半はその方法を見出せていない。衝突を完全に回避するか、あるいは生活基盤問題が完全に霞んでしまう争いに巻き込まれるかのどちらかだ。

マムダニは対立から逃げたりしない。対立の方向を変えるのだ。クオモが「経験」を武器に攻撃してきたとき、マムダニは経歴で反論したりしなかった。その攻撃を借り手にとってのテストに変えたのだ。「私の家賃が安すぎるなら、クオモに投票して。あなたの家賃が高すぎるなら、私に投票して」ってね。フォックスが無料バスを「混乱」と呼んだとき、彼は財政的な選択を迫った。イーロン・マスクの税額控除に10億ドル近く、あるいは公共交通機関を無料にするために約7億ドルを投じるという選択だ。そして、その選択がもたらす当然の結果、つまり、より安全な運転、より迅速な移動、より充実した路線について述べた。コンサルタントが「関わらない」とラベルを貼ったガザや移民の問題でさえ、彼は関与し、判断力を示し、そして統治の現場に戻った。対立が聴衆を生み、枠組みが理解を生み出した。

▼マムダニは対立から逃げたりしない。彼は対立の方向を変えるのだ。

だからこそ、彼の衝突はパフォーマンスのように感じられない。穏健派は嵐が過ぎ去るのを待ち、左派活動家はしばしば、すでに納得している人々に向けたパフォーマンスとして対立を扱う。階級第一主義のレトリックは、あらゆる論争を資本対労働の問題に還元し、実際に日常を変えるサービスデザインを見逃してしまう。マムダニは代償の明確化——誰が負担し、誰が利益を得て、何が変化するのか——を闘い、それを姿勢ではなく価格とサービスの言語で成し遂げる。怒りを報奨する報道文化の中で、彼は怒りを経済学を解説可能にする手段として用いる。フィードが他の話題を要求する時、物質的政治に注目を集める方法とはそういうものだ。

3. 様式は本質に奉仕せよ

マムダニは政治がかつて重んじた安定感を体現している。すなわち「幸福なる戦士」の精神——闘いには真剣でありながら、苦味を軽く扱い、説得が依然可能だと確信している。彼は気軽に微笑むが、決して安っぽいものではない。口調は穏やかで、ユーモアは乾いており、忍耐力が感じられる。これは現代政治を支配するインフルエンサー的姿勢とは正反対だ。そこではあらゆる

る仕草がブランディングされ、感情は効果を計算して調整される。彼は人々を感心させるのではなく、心をつかもうとする者のように聞こえる。

この開かれた性質には古い名称がある: 可用性 (アベイラビリティ)。19 世紀の政治では、多様な派閥が受け入れられる候補者を意味した—存在し、利用可能で、多数派に支持される余地のある人物だ。マンダニは、その現代版を体現している。彼は、フォックスニュースのインタビューにも臆することなく出演し、最初は友好的ではない部屋にも足を踏み入れ、他の場所と同じ主張をしてその場を後にする。聴衆に合わせて自分の見解を和らげることはしない。家賃、交通機関、育児、安全を基盤とした政治は、地区や背景を超えて通用すると信じているのだ。

これは、ほぼすべての民主党の典型的な人物像とは対照的だ。エスタブリッシュメントの政治家、つまりシューマーやジェフリーズのようなスタイルは、流暢さを意味と混同している。穏健な慎重派は、政治をブランドのように管理しようとし、怒らせることを恐れてほとんど発言しない。オンライン左派は、インターネット上の自分たちの領域で、真正性を演じることによってエネルギーを消耗している。マンダニのプレゼンスのスタイルはよりシンプルだ。つまり、パフォーマンスではなく、読みやすいこと、演出ではなく、自信を持つことだ。彼は、真面目を厳格ではなく魅力的に見せ、「ハッピー・ウォリアー」を遺物から戦略へと変えた。

4. 能力と信念をもって文化と向き合う

注目経済において、「文化戦争」の争いは、政策よりも雰囲気に関するものが多い。メディアや政治の専門家は、候補者の宗教観を読み取るために、イデオロギー的か現実的か、部族か連合かといった、敏感な問題を取り上げる。重要なのは解決ではなく、挑発である。罠に引っつかれば記事は自動的に書かれる。回避すれば逃げ腰に見える。やってもやらなくても非難される。マンダニの手法は、政治を信条ではなく道具として扱うことだ。彼は試練に真正面から向き合い、道徳的明快さを示した後、議論を再びニュー YORK へと戻す。

ガザ問題は最も明快な事例だ。本質的には「文化」問題ではないが、現実には政治メディアによってそう扱われる。マンダニは慎重さを捨てた。パレスチナ民間人の大量殺戮を非難し、反ユダヤ主義へのユダヤ人の恐怖に直接言及し、パレスチナ人の人間性を認め、リベラル派が価値観に「パレスチナを除く」抜け穴を設ける習慣を拒否した。

明確さは重要だったが、その方法の方がより重要だった。プレッシャーの下で能力テストに合格し、政界では不人気の真実を、恨み言を言うことなく説明し、それからコストとサービスについて再び議論する、という方法だ。この問題に関するジェフリーズ・シューマーの路線から世論が離れるにつれて、コンサルタントが不利と評価した要素は、彼が自分の考えを述べながら連合をまとめ上げることができるという証拠となった。

移民と警察活動についても、まったく同じパターンが別の形で当てはまった。グリーンカード保有者の逮捕をめぐる、マンダニ氏がトランプ政権の国境警備局長トム・ホーマン氏と対峙した

とき、一部の民主党員が懸念したように、彼は経済論争から逸脱していたわけではない。彼は、他の人がひるむときに、自分が戦う意思があるということを示していたのだ。道徳的な対立を「台所の食卓」の政治から注意をそらすものと見なすことが多い政党において、彼は勇気そのものが信頼性の一部であることを理解していた。移民・関税執行局 (ICE) に公の場で異議を唱えることで、政府は残酷さにひるみながら、労働者を擁護していると主張することはできないという点を強調した。

▼マムダニは、他の人が文化戦争の畏と恐れるものを、能力の証明へと変える。

犯罪と公共の安全問題でも、彼は同様の鋭さを示した—敗北が確実なスローガンをいつ放棄すべきかを見極めつつ、2020年のジョージ・フロイド抗議運動の本質を継承したのだ。「警察予算削減」を擁護する代わりに批判を受け入れ謝罪し、それでも人種的正義運動の中核的要求の一つ—精神保健危機対応に武装警官単独派遣を止める—を実行に移した。これは翻訳の模範例だった—有権者を怖がらせるレトリックを剥ぎ取りつつ、安全・改革・正義のバランスを保つ本質を残した。そして彼の政策の多くと同様、これは手頃な価格性へと回帰する:警察は壊れた社会的安全網への答えであってはならない。

いずれの場合も、彼は他者が文化戦争の畏と恐れたものを有能さの証明へと転換し、信念が実践的に扱われれば統治の道具となり得ることを証明した。

この姿勢はリベラリズムの四つの既定路線から彼を隔てる。結果より言葉に固執する「目覚めた」文化戦士ではない。評論家の賛同を得るため信念を薄める穏健派でもない—政府の機能を求めるニュー Yorker を核とした広範な「我々」を構築する。彼は経済のみを重視し人種・性別・移民ステータスが人々の経験に与える影響を見落とす階級還元主義者でもない。しかし普遍性を忘却するアイデンティティ政治の虞にもなっていない。家賃・交通・ケアへの焦点は差異を超えた共通の目的—誰か特定の認識ではなく、全ての人に当然与えられるべきものへの共有された闘い—を築く。

「反ワーク」政治が書籍禁止、移民税関捜査局 (ICE) による強制捜査、チャーリー・カーク発言への検閲、移民や活動家の拉致、トランスジェンダーへの公然たる敵意へと硬化している今、マムダニは世論そのものが再び開かれつつある空間に立つ。温度計は動いた—かつて「ワーク」に冷笑していた多くのアメリカ人が、今やその反動の残酷さに背を向けている。こうした文脈において「目覚めた」状態とは、もはや美德のパフォーマンスではなく、権威主義への抵抗である。マムダニはこの転換を、包摂を帰属意識と結びつけ、道徳的明晰さを物質的实力と結びつけることで体現する。トランプの過激主義がその関連性を明白にした。マムダニの任務—そして左派の任務—は、怒りが冷めた後もこの関連性を維持し、実践された連帯こそが戦略的实力の一形態であることを証明し続けることだ。

5. 共鳴するに十分な小さなループを保て

規律とは、他の全てを結びつける習慣である。マムダニのメッセージ・ループ——家賃、バス、保育、手頃さ、生活費——は記憶に留めやすく、ほぼあらゆる問いに当てはまるほど広範だ。ほぼ全ての議論、あらゆるやり取りは、最終的にこれらの言葉へと回帰する。答えが一文でこのループと繋がらなければ意味がない。彼はこのループを綱のように扱う：引き伸ばしすぎれば、メッセージの一貫性を保つ糸が切れる危険がある。民主党員がこの核心から遠ざかるほど、重要なものへの引き戻し力は弱まる。人々が記憶できる政治とは、まるで歌のリズムラインのようなものだ。マムダニは即興演奏できるが、メロディは必ず戻ってくる。民主党員がリフレインから遠ざかるほど、リズムを失う可能性が高まる。

●マムダニは即興演奏できるが、主旋律は必ず戻ってくる必要がある。

このループが最も鮮明だったのはフォックスニュースだった。司会者は10分から15分もの間、外交政策——ハマス、人質問題、ベンヤミン・ネタニヤフ、国際刑事裁判所——といった話題に費やした。ニューヨーク市長が制御できないが、どんなインタビューも飲み込んでしまうテーマだ。これは古典的な文化戦争の試練である：応じれば、市政よりも遠くの争いに執着しているように見え、回避すれば、逃げ腰が一貫性がないように映る。次にエリート層への安心材料確認：停戦をトランプの功績と認めるか、ウォール街への配慮を約束するか、あるいは小幅な最高税率変更がJPモルガンやゴールドマンを動揺させると認めるか？

マムダニは各質問を明確に処理した——回答後、話題を転換——そして彼が実際に立候補している職務に戻った：ニューヨークを手頃で安全な街にすることだ。「どうやって財源を確保するのか」という問いでは、ループを維持した。バス政策では、市の試験導入実績（ホームレス増加なし、運転手への暴行減少、運行時間短縮）を提示し、乗客の日常と結びつけた。「企業寄りの姿勢」を証明せよと迫られると、視点を転換：労働者に優しい都市（清潔な街路、安全な地下鉄、迅速な対応）こそが、企業が投資したい都市だと説いた。

これが、怒りや対立、注意散漫を報酬とする「注目経済」における規律の姿だ。多くの民主党員は圧力に散る——質問者をなだめようとするか、過剰な説明で自らを消耗させるかのどちらかだ。マムダニはどちらもしない。彼は輪を小さく保ちつつ反響を生み、強固に保つ。文化戦争、評論家の罵、目新しいもの——あらゆるものが彼のリズムを崩そうとする。しかし毎回、彼は同じ錨となるリフレインを見出す。

これら5つの習慣に貫かれるのは一つの思想だ：政治は具体的で、自信に満ち、集団的である時に力を取り戻す。マムダニは「手頃さ」を気まぐれから仕組みへ、「対立」を騒音から教育へ、「スタイル」をブランディングから存在感へ、「文化」を分断から連合へ、「規律」をスピンから信頼へと転換する。これが彼を、大多数の民主党員が取る技術官僚的な慎重さ、階級のみに焦点を当てる分析、社会的コミットメントを削る穏健派、中道層を疲弊させる活動家的な文化戦争と区別する点だ。

多くの有権者にとって、マムダニは解毒剤のように感じられる—トランプの権威主義的腐敗だけでなく、バイデン＝ハリス陣営の敗北や、民主党指導部が自らの支持層の中で示す気力のない姿勢に対しても。重要なのは顔の新しさではなく手法だ：民主社会主義者が 1920 年代から 1960 年代にかけてそうしてきたように、目的を通じてリベラリズムを再び安定させる方法である：

「6 月 24 日の勝利以来、我々の目指すものが実現可能か疑問を呈する者たちがいることは承知している。彼らが未来と呼ぶ若者たちが、同時に現在をも担えるのか。批判してきた左派が、成果を上げる左派にもなり得るのか。

友よ、それに対する私の答えは極めて単純だ。イエスだ。

疑い、信じきれず、我々のビジョンを共有しながらも希望を抱くことを恐れる方々へ問う——尊厳が与えられたことなど、いったいいつあったらだろうか？……

闇の時代にあって、ニューヨークは光となり得る。そして我々は断固として証明する——我々の実践する政治が、恐怖や凡庸さに陥る必要はないと。市庁舎において権力と理念が対立する必要はないと。なぜなら我々は権力を用いて、理念を現実へと変革するからだ」。